

# イタリア坂の恋



高塚 由宇

人を焦がしてしまいそうな日差しを浴びながら、私は今、"イタリア坂"の前に居る。もし、私の家の近くにコンビニがあれば、私がこの坂を訪れる事も、坂の上であのような出来事を体験する事もなかっただろう。

## 【第1章 坂の上の出会い】

----- ある年の7月下旬 -----

高校1年生だった私は【ある目的】のために、今にも倒れてしまいそうな暑さの中を命がけで、ただひたすら"目的の場所"へと向かって歩いていた。夏の太陽は、まるで自己主張丸出しのウザい同級生のように、その存在を見せ付けてくる。

それでも、時折吹いてくる山や川や木々の匂いをのせた優しい風が、ほんの少しの時間だけ私をこの暑さから解放してくれていた。私の住んでいる場所は、「まだ昭和なのでは？」と思わせるくらいの自然で溢れていて、長閑な時間が流れている。それでも昔に比べると色々なものが進化しているらしく、

「ここに住む人達の生活もだいぶ変わったのよ。ミサキはいい時代に生まれたわねえ。」

と、お母さんが週に一度くらいは私に話してくるので、よほど大きく変わっているに違いない。こんなにも自然豊かで、車もほとんど走っていないくて、野生のイノシシが私に向かって突っ込んでくる事が何度もあって、一番近いコンビニまで片道15分は歩かなければいけない。これでも昔の生活と全然違うだなんて、（昔の人はどうやって暮らしていたんだろう？）と、私は不思議で仕方がなかった。

自動販売機が町に溢れ、ネットカフェや漫画喫茶が至る所にある、そんな場所で暮らしてみたい。都会に住む人からはなんでもないようなそんな願いが、今の私の心からの願いであった。

「はぁ・・・家の近くにコンビニがあったらなぁ。」

私は今日発売したばかりの雑誌を手に入れるために、往復で30分以上はかかるコンビニへと向かっていたのだ。

その間も、汗が体をダラダラと流れ続けていて、今このまま道に倒れたら体が一瞬で焦げ焦げになってしまうか、溶けて無くなってしまわないだろうか。そんな現実ではありえないような出来事に恐怖する。

コンビニに向かう間、一体どのくらいの量の汗が流れていった事だろう。

途中、鼓膜を破るほど大きなセミの鳴き声に遭遇したり、散歩中の犬に吠えられかけたり、小さな事件に遭遇しながらも、私は必死に歩き続けた。

そして、やっとの思いでコンビニに到着すると、自動ドアが"ウィーン"と開き、私を迎え入れてくれた。暑い中をただひたすらに歩いてきたせいで、まるで地獄の鬼のような形相になっていた私を、可憐な天使達が笑顔で出迎えてくれているかのような心地よさを感じる。クーラーの冷気が私の汗を乾してくれているのだ。

（あぁ、このままここに住み着いてしまいたいっ！）

コンビニに来るたびに、私はそんな妄想を巡らせている。

しかし、ここに住むために私は歩いてきたわけではない。

（任務を遂行しなければ。）

私は自分にそう言い聞かせると目的を達成すべく、雑誌の棚へと目をやった。

すると、そこには立ち読みをしている主婦と思わしき女性が立っているではないか。私は、

(どけどけっ、私はここの商品を買うお客様なんだぞ。)

(ただ涼むためだけに立ち読みしてるあなたとは違うのだぞっ！)

と心の中で呟きながら、その女性の手前にあった買いたい雑誌の前へと躍り出た。

私が手に入れるべき雑誌は棚に何冊も積まれていたので、上から2番目のものを手に取る。そして、その女性の後ろを、大名行列の中心を行く大名のごとく堂々と通りすぎると、アイスのショーケースの前で立ち止まった。

(そうだ、アイスも買って帰ろうか。)

(いや、家につく前に絶対に溶けるな。)

(でも、歩きながら食べたら、きっと喉が渴くだろうし・・・。)

私はアイスを買うという"小さな野望"をわずか数秒で諦めると、ジュースと雑誌だけをカゴに入れて、会計を済ませ、すぐさま家へと向かって歩き出したのだった。

コンビニに居たのはわずか5分ほどだったはずだ。そのわずか5分のためだけに30分も歩かなければいけないというのは、神が私に授けた試練なのだろうか。

(おお、神よ。あなたはなぜこのような試練を我に与えるのか！)

私は真夏の"コンビニ巡礼の旅"をする際に、いつもこのように神へ尋ねている。小学生の頃から、このような巡礼の旅をしなければならない自分の運命について、神へと問いかけ続けているのだ。

そして、このような試練を乗り越える方法は何かないだろうかと考えたりもした。

(自転車で行けば良いんだ！)

そう思って自転車を買うように親に訴えた時期もあった。しかし、コンビニに向かう途中で舗装されていない道を通らなければならず、うちの近所の人達は皆、一番近くのコンビニに歩いてやってくるしかない。

それでも自転車購入を訴え続けたが、私が小学3年の時に自転車に乗ったお母さんが近所で転んで大ケガをしてからは、そんな希望も諦めざるをえなくなってしまった。

我が家にも車はあるが、コンビニで雑誌を買うためだけにわざわざ動かしてもらう事はできず、仕方なく今のように歩きで来なければいけない。読みたい雑誌を読むという事だけのために、なぜこのような苦勞をしなければならないのか。私は自分がこのような場所に生まれた事を、ただただ恨んでいたのだった。

コンビニを出た帰り道、そんな風に自分の運命を悲観しながら歩いていると、数十メートルほど離れた歩道に、男子高校生と思しき集団が見え始めた。

彼らはこの猛暑の中、まるで暑さという感覚を取り除かれてしまったロボットのように、私の帰り道をちょうど塞ぐようにたむろしてワイワイガヤガヤと騒ぎ立てている。しかも、よく見みると私と同じ学校の生徒ではなく、あきらかにガラが悪くて頭の悪そうな奴らではないか。

夏休みだから暇でしようがないのだろうが、なぜココに集まる必要がある？

少し離れていたために声は聴こえてこなかったが、

「へっへっへっ。」

とまるで昔のアニメの悪役が笑うような姿が見えたので、このままこの道を歩いて"連中"の前を歩くのは避けたいと思った。ただでさえ険しい"コンビニ巡礼の旅"の道中、あのような連中に絡まれるようでは、私があまりにもカワイソすぎる。

私の頭の中のコンピューターが、私自身を救うべく、この状態を回避するために自らの帰るべき道を計算し始めた。そして、普段は掛け算すら危うい私の脳が、暑さの中で頑張っただけの答えによって、連中を避けて家に帰る事が可能だという事が分かった。

このまま信号の反対側へ渡ってしまってから、1本奥の道を通っていけば良いのだ。ただ、そうすると小さな山を迂回するような形になり、ただでさえ遠い我が家がますます遠くなってしまふ。

しかし、あの"頭の悪そうな連中"のそばだけは通りたくない。この暑さの中で、あのような連中に絡まれるだなんて絶対にごめんだ。

(神よ、なぜこのような試練を私にお与えになるのでしょうか?)

(試練を耐えしのぎ、将来はシスターにでもなれとでもおっしゃるのですか?)

コンビニで雑誌を買い、家に帰るだけの私に、あまりにもつらい仕打ちが続くので、私は思わず神にそう嘆いてしまうほどだった。しかし、そうやって頭の中で帰るべき道を考えたり、自分の不幸を嘆いたり、神への問いかけを続けている最中も、太陽は容赦なく私を睨みつけ続ける。立ち止まっただけは連中の前に太陽にやられてしまうだろう。

私は連中に存在を気づかれないため、スパイ映画の主人公にでもなったような気分で、自分自身の気配を消した。そして、

(抜き足、差し足、忍び足・・・。)

と、心の中で言いながら、そっと信号を渡り始めた。

おそらく、とてつもなく下らない話に夢中なのだろう。連中は私が歩いている姿を認識する事もなく、気持ちの悪い笑い声で騒ぎ続けている。連中から遠ざかるようにして、いつもは通らない道を私は進み始めた。

これでもう連中に気づかれて絡まれるような最悪の事態は回避できたはずだ。私は、これで大丈夫だという安心感に包まれると同時に、なぜわざわざ遠回りをして家に帰らなければいけないのかという疑問で頭がいっぱいになる。そして、いまだにこの暑さから解放される事がないという絶望から、なんとも言えない気持ちでいっぱいになった。そんな私を太陽は相変わらず睨み続けてくれている。

「暑い・・・。」

ただひたすら、ただ一言、

「暑い・・・。」

今私が置かれている状況はその一言に尽きる。普段よりも家が遠くなるという不幸な事態とこの暑さ。もう死んでしまいたいとさえ思った。

それでも、買ったまだ雑誌を読んでいなかったので、死ぬのはせめて雑誌を読んでからが良いと思い、

(今、死んでしまいたいと思ったことは嘘です。ごめんなさい！)

と神に告げた。

これは試練なのですか？とか、コンビニに住みたいとか、死んでしまいたいとか、もし本当に神が居るとしたら、こんな私をどう思っているんだろう。クレマーのようにいろいろと訴えかけてくる私をきっと神はお嫌いだろうな。

暑さで自分が何を考えているかも分からなくなっていたが、私の足はひたすら家へと向かって無意識のうちに動いていた。両足さん達も早く家に帰りたいのだろう。この山さえ迂回していけば家に着くから頑張ってくれたまえ。

「いちに、いちに。」

「みぎ、ひだり。」

「みぎ、ひだり。」

私の両足さん達は一生懸命に動いてくれている。ありがとう。

そんな風に自分で自分の足を励まし感謝しながら、私は見事絡まれる事なく、あの連中が居る道 avoid する事ができたのだった。

そして私は少しずつ自分が進むべき方向へと進んでいく。すると、連中の姿は次第に小さくなっていき、それとは逆に、目指すべき山はその姿をどんどん大きくしていった。そして、山に近づくと、その山の中央に小さな坂があるのが見えてきた。

(こんな所に坂道があったんだ。)

家の近くとは言うものの、私の家からどこかへ向かう時は、いつもあの不良連中が居た道か、この1本隣の大きな通りを通っていたので、この山に"このような坂"がある事を私は知らなかった。

私は暑さに文句ばかり言っていたそれまでとは違い、暑さという概念を魔女によって奪われてしまったお姫様のように、とても静かなその山の小さな坂道に見入っていた。

「・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・あっ、イタリア坂だっ。」

私はその坂が【イタリア坂】と呼ばれていた事を思い出した。何年も前の事になるが、この山にそう呼ばれる坂があると同級生のマイが教えてくれた事があったからだ。

マイの話によると、当時この坂の下にイタリア料理のお店があったので、そう呼ばれるようになったらしい。渋谷のスペイン坂に憧れた高校生達が付けた名前か知らないが、なんとも安易でつまらない名前の付け方だから、

「私達が高校生になったら違う呼び方をしようね、ミサキチ。」

「うん、絶対に変えよう！」

などとマイと話していたのだが、こんな場所では商売もうまくいかなかったのか、半年ほどで店じまいをし、いつしかこのイタリア坂の存在すら忘れてしまっていたのだった。

私はその話を思い出すと、お店がどの辺にあったのか気になったので、道路を渡り、山のすぐ近くの歩道を歩き始めた。そして、ちょうど坂道の真下に立つとイタリア坂が視界いっぱい広がった。

「わあ・・・。」

私は思わず声をあげる。小さく細く舗装もされていないが、まるでどこか別の世界に繋がっているかのような不思議な空気に包まれたイタリア坂がそこにはあった。



暑い暑い世の中の、小さな小さな田舎の、町の中にある小さな山。

その四方には車道が走っているのに、この山だけは緑で溢れ、草木も生え放題。

山の反対側の車道や町並みを私の視界からは完全にシャットアウトしていて、そこだけポカンとくりぬかれた別空間のようになっている。動物や虫達もこの山では自由奔放に暮らしている事だろう。

私は山の様子をじっと観察し、山から流れてくる空気を吸い、自分がどうしてここに来たかなどすっかり忘れて、イタリア坂を見上げる。そして、坂を見上げて10秒も経たないうち、その独特な雰囲気飲み込まれそうになっていた。

まるで、異次元へと吸い込まれてしまうような感覚に襲われた私は、その感覚が恐くなったのか、坂を見上げるのを止め、その感覚を振り払うようにして、坂道を通り過ぎた所に目をやった。

するとそこには"ほんの少しだけ"洒落た雰囲気のお店があった。

(あれ? 漬れたはずなのに、どうして!?)

初め私は漬れたイタリア料理のお店がまだあるのかと思ったのだが、なにやら雰囲気がちょっと違う。店の作りがイタリアというよりも、どこか和風テイストなのである。看板をよく見ると【キッチンみやべ】と、縦書きで書かれていた。どうやらイタリア料理専門店ではないようだが、何かしらの料理を出しているお店らしい。

私はガラス越しに、眩しく反射した太陽の光を避けるようにお店の中を覗き込む。すると、2~3人の客がカウンターに座って店の人と何かを話している姿が見えた。

(あっ。)

客の1人が私に気づいたようだったので、慌てて店から離れ、また坂道の真下へと移動する。そして、気づくとまたイタリア坂を見上げてしまっていた。

すると、不思議な事にさっきは別次元への扉として機能していたであろうイタリア坂が、今度は全く違う顔を見せている。坂の道の両側を木と緑で包まれ、地球を焦がさんばかりの太陽の日差しでさえも遮っている姿が、その時の私にはオアシスのように思えたのだった。

(こんな素敵な場所が家の近くにあったのか。)

今まで、

(どうして試練を与えるのか？どうしてうちからコンビニは遠いんだ？などと、愚痴ばかりこぼしてごめんなさいっ！)

神様にそう謝罪したいくらい、この場所の存在を知れた事が私は嬉しかった。

今となっては、この坂の下にあったイタリア料理店の名前も分からないし、この坂がイタリア坂と呼ばれている事を教えてくれたマイですら、この坂の存在を忘れているかもしれない。しかし、私の目の前には確実にイタリア坂が存在し、私の意識の全てを奪い去ろうとしているのだ。

もし、私がイタリア坂を登ったら一体どんな事が起きるのだろう。ひょっとしたら妖精が出迎えてくれるかもしれない。もし妖精が居なかったとしても、天狗か河童くらいはひょっこりと顔を出して、夏休みで退屈な日々を過ごす私に新鮮な刺激を与えてくれるかもしれない。

そのような事を考えながら、気づくと私は坂道を少しずつ上り始めていた。

坂は上るのに苦勞するほどの斜傾はない。

道には石が転がり、雑草も生え放題で折れた枝や、どこかから飛んできたビニール袋などもいくつか落ちている。山の木や葉が太陽の直射日光を遮り、坂を通り抜ける風がとても涼しく、草木の香りが私の心を癒してくれるので、ここならどんなに歩いていても疲れを感じないだろう。

今まで太陽の日差しという悪魔から逃れる事ができなかった私を、イタリア坂という王子様が解放してくれたのだった。1歩1歩進むごとに、王子様のエスコートを受けているような錯覚に陥る私。しかし、坂の途中でとても大切な事に気づいてしまった。

(この道はどこへ続いているんだ?)

(私は家に帰れるのか?)

ついさっきまで、妖精やら河童やらと言っていたのにとたんに現実的な事を考えている。どうせならもっと山の中へと歩いて行ってから考えたって良いのに、急に現実に戻ってしまうから、

(つまらない女だな。)

と、私は自分で自分を嘆いた。それでも、早く雑誌が読みたかったし、今までこの暑さの中を歩いていた疲れを思い出した私は、現実的な考えのほうを優先して、この先歩いていくとどうなるのかを考えた。

今歩いているこの道は、この先も山の中へと続く。そして反対側の道、つまりさきほどの連中が居た道の先へと続いているのではないか。あるいは、そこまで行かなくても私が家に帰るためにこの先通らなければいけない道には続いている。

そんな気がした。

もし最悪、この先に道が続いていなければ、そこでさっき買ったジュースを飲み、一休みしてまたここに戻ってくれば良い。

(そうだ、そうしよう。)

頭の中のコンピューターは、答えをそう導き出した。

現実的なようで、なんとも大雑把な考えに基づいて私はまたイタリア坂を上り始めた。

足を踏みしめるたびに雑草や小石を踏むザッザッというような音が耳に響いてくる。舗装された歩道とは違い、柔らかい土の感触が、暑い真夏の太陽によって弱った私の足にはちょうど良い。そして、坂の一番上まで登ると、「ふう・・・。」と1つため息を吐き、体を振り返らせて、今度は坂の下を見下ろす。すると私は"フラフラ"とフラつき、酔っ払ったお父さんのようによろけそうになった。

上からこうして見ると、意外にもイタリア坂はかなり急な坂だったという事がよく分かる。坂の下に道が見えたが、坂の下から見上げたような素敵な雰囲気はそこにはない。

なんとなくガッカリした私は、次に坂の上から山のほうへと続く道を見てみた。道は少し曲りくねったS字になって山の奥へと続いている。ここもまた、木々に覆われていてなかなか良さ気ではあったが、ベニヤ板のような物が積み重ねられていたり、バケツやほうきが転がっていたりして、これまた坂の下から見上げたイタリア坂ほどの輝きはない。

(イタリア坂は下から見上げるのが一番だな。)

と、私は思った。

そして、そのまま道を進んでいく。小さな山なので、すぐに反対側へ出ると思っていたが、意外にもクネクネとそして少しずつ傾斜が増していく道は、想像以上に長く続く。

(やはり登るべきではなかったのか・・・。)

また現実的でつまらない考えが、私の頭をよぎりかけたその時だった。

木々の葉で邪魔されてハッキリとは見えないが、道の先で小さな人影のようなものが私の目に飛び込んできたのだ。

(何か居るっ!?)

私は、そこに居るのが"何なのか"を確かめたくなくて、その人影のようなものにさらに少し近づいた。

(ひょっとしたら妖精や天狗なのだろうか?)

(もし、そうだとしたら私は一体どうなるのだろうか?)

そんな心配も無くは無かったが、今はその人影のような物の正体を知りたい気持ちのほうが圧倒的に強かった。

(一体この先には何が待ち受けているのか?)

私はそっと足音を立てないようにさらに前進する。そして、その人影のようなものに近づくとつれ、その姿がハッキリしてきた。

(男の子だっ。)

見たところ、小柄でほんの少しやせ気味といった感じの中学年くらいの少年がそこには居た。ちょうど私の居るほうを背にしてしゃがみこんでいるため、私の存在には気づいていないらしい。

(私より年下かな。)

その少年は、Tシャツにジーンズという格好で、手にはスケッチブックを持って、何かを描いているようだった。

イタリア坂の下からは見えない誰も居ない道の先で、1人静かに絵を描く少年。羽はないから妖精ではなさそうだし、鼻もいたって人間並みだから天狗でもないだろう。頭の上にお皿がないから河童という事もなさそうだ。

(それにしても、どうしてこんなところで一人でスケッチなんかを?)

私は彼の存在が気になりつつも、

(どっちみちこの道を通らなければいけないのだから。)

と、まるで彼の存在が気にならないかのような言い訳を自分で自分に言い聞かせると、そのまま道を進み彼のほうへと近づいた。

すると、私が雑草を踏みしめて歩く足音が聞こえたのだろう。

彼はスケッチブックから目を外し、振り返るようにしてこちらを見ると、かなり驚いたような顔をしたが、またすぐに絵を描く作業を再開した。

しかし、私が現れた事に慌てて動揺していたのか、

「カンッ、カラカンッ。」

と小さな物体を1つ落とした。

木製の乾いた音が辺りに響き、彼が落としたその物体が私のほうへと転がってくる。このまま転がれば、道のない山の斜面のほうへと転がり落ちてしまう。私は転がるその物体を慌てて手に取り拾い上げた。

それは、水色の色鉛筆だった。

私が色鉛筆を拾ったのを、彼はスケッチブック越しに覗き込むようにして確認する。そして、スケッチブックを顔の前に掲げたまま、ゆっくりと私に近づき、手を差し出した。

「はいっ。」

私はそう言って水色の色鉛筆を彼の手の上にそっと置いてあげた。すると彼は何も言わず、スケッチブックに目をやったまま、元居た場所に戻って座った。

私は、お母さんやお姉ちゃんのように口うるさいほうではない。しかし、おそらく彼は私より年下だろうし、さきほどの不良連中に遭遇したせいで少しイライラしていたせいか、

「お礼くらい言ったら？」

と、それほど強くない口調ではあったが、彼に言ってしまったのだ。

すると彼は、スケッチブックで顔を隠すようにしたままボソボソと何か言った。

「えっ？」

なんと言ったのか分からなかったの、私は少し大きな声で聞き返す。

そんな私の態度に対して彼は、スケッチブックから覗くようにこちらを見たり、またスケッチブックを見つめたり、キョロキョロと私の様子をしばらく伺ったあと、

「ど、どうも・・・。」

と、セミの鳴き声の100分の1くらいの大きさで言うと、私がここに現れた理由など全く興味がないと言わんばかりに再び絵を描き始めた。

そのなんとも不可思議で不自然な対応に私は彼の事が気になった。

気になったと言っても恋とか愛とかそんなものではなく、彼の事が少し心配になったのだと思う。

(彼は今、自分がいる場所がどこか分かっているのかな?)

(彼はちゃんにご飯を食べているのかな?)

そんな事を心配させるくらい彼の声は弱々しく、態度はおどおどとしていた。

それから10秒ほどの沈黙が流れた後、彼は再びスケッチに集中しようとしている。私は彼が何を描いているのかが気になり始めていた。今、彼の事を知るためには、彼が今何をしているのかを知るのが1番手っ取り早いと思ったからだ。

描いている絵を覗き込むなんて失礼だと思ったが、年下と思われる相手にそこまで気を使うことはないだろう。私は彼のほうへゆっくりと近づく。

彼はスケッチブックに夢中なのか、私を無視しているだけなのか分からないが、近づく私には無反応だ。

私は、少し離れた所から彼が描いていた絵を覗き込んだ。

するとそこには、青い空と緑鮮やかな草木が綺麗に描かれているではないか。  
なんとも言えない淡い色使いに私は思わず、

「うわぁ、上手だねー！」

と声をあげてしまった。すると彼はこちらを振り返り、ビックリしたような顔でしばらく私の顔を見たあと、ほんの少しだけ口元を緩ませて微笑んだように見えた。

私は1歩、2歩とゆっくり彼に近づきながら、

「いつもここで描いてるの？」

と尋ねる。彼は再びスケッチブックのほうへ顔を向け、無言のまま「うん」と頷いた。  
会話自体を嫌がっているようではなかったのも、そのまま絵を描く彼をしばらく見つめ、また話しかけた。

「学校はどこ？」

このあたりの学校は数えるくらいしかない。ひょっとしたら母校の後輩かもしれないし、そうじゃないとしても、彼の事が気になっていた私は何か質問をしたかったのだ。  
しかし、今度はこちらを振り返ることもなく、何も言わずに黙々と絵を描き続けている。

(絵に集中したいのかな。)

私は、また少し彼から離れると辺りの様子を見てまわった。

私が今見ているこの山の風景はまさに"自然の中"と言った感じで、さきほどまで真っ赤になって私を照らしつけていた太陽が、緑の木々に遮られ、冬の静かな太陽のようになっている。たまに聴こえてくる自動車の音も小さく、まるで天界から下界を望む天使にでもなったような気分になれた。



私はしゃがんで花を見つめたり、空をぼんやりと眺めたり、さっき買ったジュースを少し飲んだりした。そして、彼から少し離れた所で、しばらくここの空気を楽しむように過ごしていた。

しばらくすると、たまにチラチラと私のほうを見ていた彼は色鉛筆をしまい、スケッチブックをバタンと閉じた。

「あっ、ごめん。あたし邪魔かな？」

人が絵を描いているのに、何も考えずに近くをウロウロとしていた私はふと我に返って彼に尋ねた。しかし、彼は俯き加減で黙ったまま、スケッチブックと色鉛筆の入ったケースを脇に抱え、黙って歩き出した。

その様子をぼんやりと見つめて立ち尽くす私。

彼はそのまま、この先にあった道の奥のほうへと歩いていく。

彼は私の前から、  
振り返ることもなく、  
手も振ることもなく、  
黙って去っていった。

----- 第1章完 -----

## 【第2章 再会】

それからどれくらいの時間が経っただろう。

気づくと私は、まるで"告白した人にフラれたような感覚"に襲われ、どうしたら良いかわからなくなっただけで走り出していた。

(この場から早く抜け出したい。)

(逃げ去りたい。)

彼が通り過ぎた道を小走りで進み、足音をなるべく立てないようにして通りすぎる。

しばらく進んで下り坂になったのち、さきほど私の頭のコンピューターが計算してくれた通り、私の家へと向かう道に出る事ができた。そこでまたジュースをゴクゴクと飲むと、エネルギーを満タンにしたロボットのように、私は家へ向かって一気に走り続けた。

そして、本来なら15分以上はかかるであろう道を、5分ほどで走りきり、家へ帰る事が出来た。途中、太陽の存在など忘れてしまっていたが、それでもやっぱり太陽は私を焦がすように照らし続けていたので、家に着いた時にはすっかり汗だくになっていた。

「ただいま。」

「ミサキ？おかえり。」

お母さんが台所から出てきた。そして、汗だくになって息をハアハアさせる私の姿を見て、

「あらちょっと、なに、そんなに息を切らせて。どうしてそんな・・・。」

「走ってきたからっ。」

私はお母さんとの会話を断ち切るようにして終わらせると、そのままお風呂場へ向かいシャワーを浴び始めた。

一通り体の汗を流し、髪を洗うため目を瞑る。

すると、さきほどのスケッチブックの少年のほんの少しだけ微笑むような顔が浮かび、続けて彼が俯いて家へと入っていく姿が頭の中で再生された。そして、私が彼の周りをウロウロとうろつき、彼が気分よく描いていたであろうスケッチを邪魔してしまったのだらうと、自分への嫌悪感でいっぱいになった。

(なんですぐに帰らなかったんだ、私は。)

(絵を描く邪魔をしちゃったじゃないかっ！)

(そもそも、なんであの不良連中はあそこに居たんだ、まったくもう・・・)

そんな怒りや憤りを含んだ気持ちを汗と一緒に流してしまえないかと、ただひたすらシャワーを浴び続けたが、汗だけでなく涙すら一緒に流れている有様で、私の体はますます濡れていた。

いつまでシャワーを浴びればこの涙が止まるのか分からなかった私は、そのまましばらくシャワーを浴び続ける。そして、なんとか歯を食い縛って涙を止めると、お風呂場から急いであがった。

しかし、着替えを終える頃には再び強い自己嫌悪に襲われていた。

「ちゃんとタオルで拭きなさいよ。」

「分かってるよ！」

私は母との会話を再び断ち切るように終わらせると自分の部屋に戻り、ベッドへバタリと倒れこむ。暑い中をコンビニに向かい、いつもと違う道を通ったせいで、名前も知らない絵を描く少年の邪魔をしてしまい、走って帰ってきた。

(一体、私は何をしてるんだ・・・。)

今のお天気とは違い、モヤモヤと晴れない気持ちで心をいっぱい満たされてしまった私は、買って来た雑誌も読まずにただボーっと天井を見上げていた。そして、時折涙を流しては、

(あの時、不良達があそこに居なければ。)

(あの時、イタリア坂を登ろうと思わなければ。)

(そもそも、イタリア坂なんて私の興味をそそるような名前をつけたのはどこのどいつだ・・・。)

などと、考えても何も解決しないような事で頭を巡らせている。するとそこへ、台所からお母さんの声が聴こえてきた。

「ミサキー、夕飯の支度手伝って。あなた、今日当番でしょ？」

うちでは夕飯の手伝いが当番制になっていた。私とお姉ちゃんの二人が交代でやっているのだが、よりにもよってこんな最悪の日に私の当番の日が重なってしまったわけだ。私は何も話したくないし、まして夕飯の支度などする気分などではない。

お母さんの声をそのまま"シカト"するつもりだったが、

「ねえ？ミサキ。ミサキ～！？」

と、徐々に大きくなるお母さんの声に仕方なく、

「はい。」

と、何事も無かったかのように平静を装って答えた。

そして、何かを考えていないと自分を責めてしまいどうしようもなかった私は、さきほどは会話をする気にさえならなかったお母さんの一言に、まるで助けを求めるかのように自分の部屋を飛び出して台所へと向かった。

台所に入った私は、お母さんの指示に従い黙って夕飯の支度を手伝う。

お母さんは私の"異変"をなんとなく察知したのか、必要な事以外は話を振ってこない。きっと離婚間近の熟年夫婦はこんな状態なのだろう。私とお母さんは、必要な事以外は一切言葉を発する事なく、黙々と夕飯の準備を進めた。

そして、夕食の時間。

今日は夕飯の当番ではなかったお姉ちゃんも食卓に現れる。お父さんは今日も仕事で遅いようだ。

夕飯の準備中も、スケッチブックの少年のことが頭から離れなかった私は、イタリア坂についてお姉ちゃんに聞いてみようと思った。お姉ちゃんは今、フリーターで私よりも4年ほど人生の先輩だ。イタリア坂が名づけられた時にちょうど今の私くらいの年齢だったので、イタリア坂について何か知っているかもしれない。

「ねえ・・・？」

「なあに？」

「あのさ、イタリア坂って知ってる？」

「イタリア坂あ？」

「公民館の先にある山の坂の事。」

「ああ、あの坂ねえ。そういえば、そんな風に呼ばれてたっけね。」

「あの坂の下にお店があったんでしょ？」

「ふふっ、そうそう。イタリア料理専門店ね。すぐ潰れたところ。」

お姉ちゃんは皮肉たっぷりに言って笑う。

するとそんな私とお姉ちゃんの会話を興味深そうに聞いていたお母さんが、

「前、イタリア料理のお店があった所でしょう？あそこね、今度新しいお店が入ったらしいわよ。なんて名前だったかしらね。」

と一気にまくし立てるように言った。私は、「キッチン・みやべ。」と教えようとしたが、そのネーミングのセンスがなんとも言えなかったので黙っている事にした。

するとお母さんは1人で話を続け、

「そのお店、お父さんと息子さんの二人暮らしの親子が東京から引っ越してやってるらしいわよ。もともと、そのお父さんの父親がこちらに住んでいた人らしいんだけど。近くのほら、柏町よ。あそこに住んでいてね。若い時に東京に出て、向こうで結婚して・・・それで、こっちに戻って店を始めたらしいんだけど。なんかいろいろあるらしいのよねえ・・・。」

と意味深げに言った。

それにしても主婦の情報網というのは凄いものだ。一体どこからそのような情報を手に入れたのか。戦国時代に忍者になっていたら城をいくつも落とし、第二次世界大戦時にスパイになっていたら日本を勝利に導いていたかもしれない。私はお母さんの情報収集能力の高さに感激しつつ、

「いろいろって？」

と尋ねた。

「うん、いろいろね・・・。」

お母さんは少し口ごもり、話そうか話すまいか迷うような感じで、

「なんかねえ・・・そこのご主人と奥さんがね、昨年離婚したらしいのよねえ。」  
と言った。すると、その話を聞いたお姉ちゃんが、

「離婚って、最近は何に珍しい事でもないでしょ。」

とクールにツッコんだが、お母さんはそのまま、

「それで、そのせいか分からないけど・・・。息子さんが学校へ行かなくなったらしくてね。」  
と話を続けた。

そうか、私が見たあの【キッチン・みやべ】のお店の人はけっこういろいろと苦勞をしているんだな。人生というのは大変なものだ、などと私が考えていると、母は録音されたCDのように話を続ける。

「学校へ行っていない昼間はおじいさんの住む山の上の家に居るらしいんだけど。毎日、絵ばかり描いてるらしいわよ。」

(絵ばかり・・・。)

私はお母さんのその言葉を聞いた瞬間、あのスケッチブックの少年の事を思い出していた。

私が見たあのスケッチブックの少年は、その【キッチン・みやべ】の息子さんなのかな。いや、たぶんそうなのだろう。私は、あの少年を見た時から少し気になっていたのだが、学校へ行かず、絵ばかり描いているという話を聞いて、なんとなく納得できる部分があったからだ。私ともあまり話をしなかったのも、人とコミュニケーションをとるのが苦手だからかもしれない。私がどこの学校か尋ねた時も返事をしなかったし。

(そうか、だからなんだ。)

私は、イタリア坂の上で出会ったスケッチブックの少年が"キッチン・みやべ"に越してきたという事を1人で確信することができた。

「東京で暮らすっていろいろ大変みたいね。」  
とお母さんが言うと、お姉ちゃんもそれに同調するように

「こっちで暮らしたって、いつまで続くかどうか分かんないよ。」  
と言った。

そして、お母さんもまたそれにさらに同調するように

「そうよねえ。学校へも行ってないんじゃないかねえ・・・。」  
と話を続けた。

2人が【キッチン・みやべ】の家の人を批判するかような話をし始めたので、私はなんだかとても気分が悪くなった。そしてその気分を抑える事ができなくなったため、大砲をドカンと撃ち放つような勢いで、

「べつに、ここで暮らしたい人は勝手に暮らせば良いでしょ。お母さんとお姉ちゃんにその人達の何が分かるの!？」

と言い放つと、食器を流しへガチャンと置いて、

「ごちそうさま!!」

と、捨てゼリフを吐くように言い、怪獣が歩くようにバタバタと大きな足音を立てながら自分の部屋へと戻ったのだった。

べつにあのスケッチブックの少年をかばったわけじゃない。ただ、人には人それぞれ生き方がああるし、それを他人がとやかく言うものではない。そう思って私は今までも生きてきたのだ。

それにしても、私はなんて酷い事をしてしまったのだろう。学校へ行けず、絵を描く事を楽しみにしていると思われる少年の、絵を描く邪魔をしてしまった。彼の事を何も知らないくせに、どこの学校か聞いたり、色鉛筆を拾った程度でお礼の言葉を述べると言ってみたり、今思えば本当に酷い事をしてしまった。

私はそれから一晩中、今日自分がした行動を反省した。

もし、タイムマシンがあれば、時間をさかのぼり、何も考えずに興味本位でイタリア坂に登る"バカで愚かな私"を、私自身の手でぶん殴って止めてやりたい。

「お前はこれから、最低の悪事を働く事になる。だから私は、私を殴るのだ!」

いや、そもそも私が私に出会ったら、タイムパラドックスが起きて宇宙が消滅してしまったり、あるいは私自身が消えてなくなってしまうかもしれない。それは困る。

私はまた、まったく必要のない事に頭を働かせ、無駄な事を考えていた。

でも、そんな風に現実逃避しなければ頭がどうにかなってしまいそうなくらい、彼にしてしまった事を後悔していた。



そして、ベッドに潜るとタオルケットを被り、頭を抱え込むようにして横になるといつの間にか涙が零れ落ち、それを何度も手で拭っているうちに、いつの間にか眠りについていたのであった。

翌朝。

目が覚めた私は、そのままベッドでタオルケットに包まれたまま、昨日の事を思い出していた。食卓での会話に腹を立てたり、昨日自分が行なった行為を再び思い出して憂鬱な気分になったり、とにかく気持ちが落ち着かない。

しばらくして、私はある決心をした。そして自分の部屋で昼食を食べると、夏休みの宿題には手も付けず、イタリア坂へ向かった。一体何をどうすれば良いか分からない。だが、家でじっとしている事ができなかったのだ。とにかく、あの少年にもう一度会って謝るしかない。

昨日と同じような暑さの中を昨日と同じ道を通る。今日はあの不良連中が居ないようだが、私の目的はコンビニ巡礼ではない。そこから先もまた昨日と同じようにして、イタリア坂のほうへと進む。そして、家からどれくらいの時間で着いたかも分からないくらいの早さで、私はイタリア坂に着いた。

【キッチン・みやべ】の店内を覗くとお店の主人、つまり昨日のスケッチブックの少年のお父さんと思しき人の姿が見えた。私は一言挨拶でもしようかとも思ったが、向こうは私の事などまったく知らないのだし、挨拶をしても変に思われるだろう。

今はとにかく彼に会って昨日の事を謝らなければいけない。  
私はそのままイタリア坂をただひたすら駆け上がった。

昨日は私をエスコートしてくれた王子様のようなイタリア坂が、今日は処刑場へと私を導く死神のように私を重く暗い気持ちにさせる。それでも私は自分自身の過ちを償うため、十字架を背負ってでもこのイタリア坂を登っていかねばならない。

私は汗だくになりながら他のことなど何も考えず、一心不乱に坂を上りきる。

すると、昨日とは違う時間に訪れたその場所に、まるで昨日からタイムスリップしてきたかのように、昨日と同じ体勢で座り、昨日と同じようにスケッチブックを見つめて色鉛筆を片手に絵を描いている少年がそこに居た。

(良かった、居てくれて・・・。)

私はほんの少しだけ安心した。彼は昨日と変わらず絵を描いてくれている。その姿を眺めているだけでも良いのかなと思うくらいに嬉しかった。そんな私が、近づいて話しかけようかどうかしばらく迷っていると、彼は持っている鉛筆の上に飛んでいた蝶を呼び寄せて乗せ、じっとそれを眺めている。

しばらくその様子を見ていても、彼はジッと蝶を眺めたままだ。このままでは陽が暮れて夜が明けて、夏休みが終わってもジッとしているのではないかと思った私は、思い切って彼に近づいた。

ザッザッと土や石を踏みしめる私の足音が辺りに響くと、彼はその音に驚いてこちらを振り向いた。

私は思い切って、

「こ、こんにちは。」

と話しかけた。そしてすぐに、

「昨日は絵を描く邪魔をしてしまっでごめんなさい。」

と謝った。

すると彼は少しビックリしたような表情をしたあと、昨日と同じように微笑んだような表情で、首を横に振って「べつにいいよ。」というような素振りを見せた。

「私、ここに初めて来たからいろいろ観たくて。それで・・・ホントにごめんなさい。」

と彼の近くをうろついてしまった事も説明して謝った。

彼はまた「もういいよ。」という感じで首を横に振ってスケッチを続けた。

彼への謝罪が終わり、彼も私の事を許してくれたようだったので、私はホッとした。

そして、大きな大きなその目的を達成した安堵感と同時に、その後何をするかを全く考えずにここまで来たために、それから何をしたら良いか分からなくなってしまった。

でも、また彼の絵を描く邪魔になってしまうかもしれないし、少し話をしたら適当なタイミングですぐに帰ろう。・・・でも、できたらもっとお話をしてみたい。昨日の自分の行動を反省する気持ちと、反省を全く感じさせない、心のどこかから湧き上がる欲望が私の心の中で戦っている。

そんな私をよそに、マイペースな彼は突然手に乗せていた蝶を羽ばたかせる。そして、彼は突然無口なその口を開き、

「コノハチョウ。」  
と言った。

「???'」  
私が頭にはてなマークが3つくらい並ばせたような顔をしていたからだろう。彼は今羽ばたかせた蝶を指差した。どうやらこの蝶の名前らしい。

「コノハチョウって言うの？」  
私が聞くと彼はウンと頷いた。

「コノハチョウはこの時間にしか来ないから。」  
彼は私に蝶の事を教えてくれているようだ。

「へー、そうなんだ。」

私はそう言うと、思わず口元を緩ませた。彼が私に話しかけてくれていることがとても嬉しかったのだ。

そして、蝶について詳しい彼を少しだけ尊敬した。彼はスケッチブックを広げると、さきほどの蝶を描き始めているようだった。

「・・・ここで見ていてもいい？」  
私は、それまでより小さな声で、恐る恐る彼に尋ねる。すると、彼はまた黙ってウンと頷いた。

昨日までのようにスケッチブックで顔を隠したりする事はない。

ひょっとしたら彼のほうも、昨日何も話さずに家に入った事を申し訳ないというような気持ちがあったのかもしれない。それで今こうしてお話ししている事を、彼もほんの少し望んでいてくれたのかもしれない。

妄想かもしれないけれど、私はそんな風に自分で思うようにする事にした。

(サッサッサッ。)

彼は黙々とスケッチを続けた。

色鉛筆を使う彼は、何かにとりつかれたようにスケッチブックを見つめ、その手を動かしている。そして、色鮮やかな花と草、そしてさきほど名前を教えてくれたコノハチヨウの姿を見事にスケッチブックの上に描き出していた。

「すごいっ。上手だね。」

お世辞などではなく、私は思った事をそのまま口に出す。

「毎日描いてるから。」

彼は少し照れた様子で一瞬微笑みを浮かびかけたが、すぐにそれを押し殺すかのような表情をしてそう言った。

「毎日描いてても、こんなにうまく描けないよ。」

と私が言うと、

「誰でも描けるよ、こんなの。」

と彼は謙遜を続けたが、そんな会話をしながらも彼のスケッチブックの上にはまた、私の目の前にある自然が写し出されていた。

私が感心しながら彼のスケッチを見ていると、しばらくしてまた一匹の蝶が飛んできた。

「これは、アゲハチョウ。」

彼が親切に蝶の名前を教えてくれるのもとても嬉しかったのだが、その時の私にはもっと気になる事ができていた。聞こうか聞くまいかしばらく迷った末、私は思い切って彼にその気になることを尋ねてみる事にした。

「ね、名前は？」

「え？」

「蝶じゃなくて、"あなた"の名前。」

私がそう尋ねると、彼は蝶のほうを見つめたまま、数秒ほど何かを考えるように間を空けて、

「ショウタ。」

と答えてくれた。

「ショウタか、いい名前だね。」

「・・・。」

いい名前と言ったのが恥ずかしかったのか、私の言葉が聴こえているのかいないのか分からないくらい、彼は無反応だった。

「ショウタだから、ショウって呼ぶ事にしよう。」

私は、人に凝ったあだ名を付けるのが少しだけ得意だったのだが、この時はなんの捻りもなく、ただそのままショウタの名前を呼びやすいように呼ぶ事にした。私がショウと彼の呼び名を決めたことに対しても、ショウは無反応だった。

「私はね、ミサキだよ。」

「ミサキか。」

「今、高1なの。ショウはいくつ？」

「僕は13歳。」

(13才か、やっぱり私よりも年下だ。)

私は、年下の男子に呼び捨てにされた事に対して少しだけムツとしたが、ショウの名前とショウの年齢を知る事ができて幸せだった。ひょっとしたら、宇宙が誕生してから今の今まで存在し続けたのは、この瞬間のためだったのではないかと思うくらいに。

しかし、幸せというものは長く続くものではない。そんな私の小さいようでとても大きなその幸せをぶち壊す緑色の物体が、目の前に突然姿を現したのだ。

「これは、アマガエル。こいつはこのへんで一番大きいから、ノッポ。」  
と、ご丁寧にカエルの個人情報まで紹介しながら、ショウは私達に近づいてきたカエルを手に乗せてこちらに向けた。

こんな自然のそばで育った私だが、カエルだけは大の苦手で、近くに居るだけでゾワゾワと鳥肌が立つし、触ろうものなら悲鳴をあげて飛び上がって気絶しそうになってしまう。

「わっ、わたし、カエルダメ……。」  
声も震えるほど怯える私に対して、ショウは少し悪戯っぽい笑顔を見せると、私のほうへカエルを近づけた。

「ダメだって――！！」  
私はサッとショウから遠ざかる。  
するとショウはニコニコと笑って、カエルをもう片方の手でなで始めた。

「かわいいのに。ノッポ。」  
そう言って、カエルを撫でる自分をどんな様子で見ているか確かめるように私のほうを見てまた笑った。

ショウの絵は本当に素晴らしい。でも、彼のカエルが好きなのは私は好きではない。ノッポでもチビでも良いが、とにかくカエルだけは絶対に触れたくもない。カエルを撫でたり、また私のほうへ近づけたり、一通りの事をして私を"弄んだ"ショウはカエルを地面へと放した。

「はぁ・・・も、もう捕まえなくていいよ。」  
私がつまみ息をつきながらそうお願いすると、ショウは、

「ははは。」  
と楽しそうに笑った。

ショウは人見知りだし、人と付き合うのも苦手なようだが、こうして悪戯をするのは好きらしい。もし、これからショウと仲良くする事が出来るのなら、そこだけは気をつけなければいけないなと私は思った。

カエルを地面に放したショウは、今まで描いていた絵を描き終え、スケッチブックをめくる。そして場所を移動するためか、辺りを見回した。

「ほかの所で描くの？」  
「うん。カエルがたくさん居る所で描く。」  
とショウは無表情のまま言った。

「もう―――！」  
私が怒ると、ショウはまたそれを見て微笑んでいたの、私も思わずニコニコと笑顔になっていた。

その日はそんな感じで、ショウが黙って絵を描いて、私がそばでそれを見て、植物や昆虫について説明してもらったり、カエルを懸命に探すショウを私が必死に止めたりといった騒動がありながらも、楽しく過ごす事ができた。



ふとケータイの時計を見ると、もう午後5時前になっていた。夏休みだが、5時には帰るようにと言われていた私は、そろそろ帰らなければいけないと思い、

「ごめん、門限が5時だから。今日はそろそろ帰るね。」  
とショウに告げた。すると、ショウは寂しそうな顔を浮かべたように見えた。そして、

「うん。」  
と頷く。

「また明日来てもいい？」  
私がそう尋ねると、ショウはまた黙って頷き、今度は確実にほんの少しだけ微笑んでくれた。

私がイタリア坂を下り始めると、ショウはこちらを見つめて何か言いたそうだったので、

「バイバイ。」  
と言って私が手を振ると、彼も口を動かし、"バイバイ"と言ったようだった。  
あまりにも小さくて聴こえなかったのか、そもそも声を出していなかったのかは分からない。  
でも、昨日は黙って家へと入っていったショウが、今日はこうして見送ってくれている。そんなショウの姿を見る事ができて、私はまるで初デートを終えたかのような気持ちになっていた。

・・・と言っても、デートなどまだした事はない。それでも、ウキウキと心がスキップするような気持ちで家に帰る事ができたのは確かだ。

「ただいまー。」

「おかえり。」

「お母さん、今日の夕飯なに？」

「今日は生姜焼きよ。先週と同じだからって文句言わないでね。」

「言わないよー、そんな事。」

「あら、あなたいつも似たような献立ばかりだってブツブツ言ってるじゃない？」

「今日は生姜焼きが食べたい気分なのっ。」

実際には生姜焼きを食べたい気分というわけではなかったが、昨日と違って私はとにかく機嫌が良かった。今日は夕飯の手伝いの当番でもないし、昨日みたいに泣きたい事なんて1つもない。私は夏の暑さを吹き飛ばすようにしてサッとシャワーを浴びると、部屋に戻って、昨日買った雑誌を少しめくり、パラパラと読んでいた。

(そういえば、あのカエルの名前はなんて言ったっけ。)

(ノッポだったかな。)

雑誌を読みながら、ショウが説明してくれた"私の大嫌いな"カエルの名前を私は思い出していた。カエルなんて大嫌いと思う心とは正反対に、顔はニコニコとしているのが自分でもよく分かった。

「ミサキ、夕飯よー。」

「はーい。」

私は即答すると食卓へと向かった。

食事中、私が生姜焼きをパクパクと食べているとお姉ちゃんが、

「ミサキ、あんたが言ってたイタリア坂ね。」

「あれ、私の同級生のナツコのお兄さんが名前を付けたんだって。」

「へえ、そうなんだ。」

「で、その時にさあ……。」

と何故かイタリア坂の名前が付いた際のエピソードを10分ほどに渡り、食事をしつつ私に話してくれた。私はべつにイタリア坂の名前について知りたかったわけではない。それでも、せっかく話してくれていたのでもうウンウンと興味がありそうに聞いてあげた。

そして夕食を食べ終わり部屋へと戻った私は、ショウが説明してくれた昆虫や植物の名をまた思い出していた。

(そうだ、明日はショウが教えてくれる前に、あたしが先に名前を言ってやろう。)

そんな風に思って、植物辞典を引っ張り出して読み始めたが、うちの近くにどんな草木が咲き、昆虫が居るのか私には全く分からなかったのでもう辞典をすぐにバタンと閉じた。

そしてふとケータイを見ると、マイからメールが来ていた。

イタリア坂について覚えているかを聞いた私のメールに、

(そんなのあったねー。)

といった内容の返信だった。私はショウについて話そうかと思ったが、ショウの事を誰にも知られたくないという思いがそれを邪魔をしたのか、夏休みの近況報告に留めておいたのだった。

### 【第3章 2人の時間】

翌日、再び会いに行く約束をしていた私はショウに会いに行った。さすがに午前中からお邪魔しては悪いかなと思ったので、適当に勉強を済ませてお昼ご飯を食べると、午後1時の少し前には家を飛び出すようにしてイタリア坂へと向かった。

太陽が燦々と照りつけ、まるで砂漠のど真ん中にあるかのようなこの道を、私はお城の舞踏会へと向かうシンデレラのような気持ちで軽やかに進んでいった。そして、自分の家に帰ってきたかのような気持ちでイタリア坂を上りきると、その先の道の横で絵を描いているショウの姿が見え始めた。

「ショウ。」

私が名前を呼ぶと、ショウはこちらを見て「よお！」というような顔をしたが、特に言葉は発しなかった。

「こんにちわっ、今日は何を描いてるの？」

「カエル。」

「ええ！？カエルッ、どこっ！？」

私はしばらく辺りを見回したがカエルは見当たらない。

「ウソッ、カエルなんて居ないじゃん！」

「はははっ。」

まるでお約束のように、ショウは私のカエル嫌いをいじってくる。そして、その日もショウがスケッチに何か描き、私はただじっとそれを横で見ている。"じっと"といっても、「これは何？」とか、「あれはなんて名前なの？」と何か分からない事があればすぐにショウに聞いていた。

一昨日は、こんな風にしてショウのスケッチを邪魔してしまったのに、私も懲りないやつだ。それでもショウは「これは〇〇」「あれは〇〇だよ」と知っているかぎりの事を私に教えてくれた。

「ショウって、東京に居たんでしょ？なんでこんなにこの辺の植物とかに詳しいの？」

「こっちに来てから調べた。」

「こっちに来てからまだ3ヶ月くらいだったっけ？それにしてもよく覚えてるね。」

「こういうの好きだから。」

私の質問に、スケッチを描く手を止めることなく、目を輝かせて絵を描き続けるショウ。

彼は学校には行っていないが、絵を描く才能もあるし、何かを覚える事も決して苦手ではなさそうだ。ただ、学校そのものがショウには合わないだけで、ショウは何も悪くないんだと私は思った。

結局、その日も門限ギリギリまで私はショウと一緒に過ごした。そして、また次の日に会いに来るという事を伝え、イタリア坂をあとにした。

私は次の日も、まるで恋人の家に足しげく通うかのようにショウに会いに行った。

それまではコンビニに向かうためだけの目的で歩き、暑さでどうにかなってしまいそうだったが、不思議な事にショウに会いに行くのだと思うと、暑さをあまり感じなかった。

さすがに歩いている途中で汗はかくし、喉は乾くが、片道20分あまりの時間があっという間に過ぎる。つい数日前までは、私の事を焦がそうとしていた太陽の強く熱い光が、今は私をショウのもとへと導くための光の道となり、夏の暑さが私の心の中の熱さに比例しているかのようにさえ思える。

私はイタリア坂に着くと、初めてこの坂を訪れた時のように坂を見上げてみる事にした。  
昨日はショウに会いたい気持ちが先走ってしまい、イタリア坂をゆっくりと見る事ができなかったからだ。

すると、どうだろう。

この前は異次元の扉だったり、私を暑さから解放するオアシスのようだったりしたイタリア坂が、今日はまた違った顔を見せていた。

草木の間から差し込む太陽の光がキラキラととても美しく、まるでこの先に居るショウの存在を照らし出してくれているかのように輝いて見える。そして、私に「早く上っておいで。」と声をかけてくれているように感じられた。

私は心の中いっぱい溜まった"何か"を吐き出すように、「はぁ・・・。」とため息をつき、気持ちを落ち着かせるとイタリア坂を上り始めた。

私はこれから先、一体何度イタリア坂を上り下りするのだろう。

ひょっとしたら、数え切れないくらい上り下りして、ショウとも数え切れないくらい会う事になるかもしれない。私はそんな事を思いながら、ゆっくりとした足取りでイタリア坂を上りきった。

そして、ふと坂の先のほうへ目をやると、そこにはショウの姿があるのが分かった。

ショウは曲がりくねった道の先の草木に隠れたような所に座っており、そこに居ると意識して探さないかぎり、イタリア坂を上っただけではすぐには見つけれないだろう。

そんなショウは今日も相変わらず昆虫や花をじっと見つめてスケッチブックに描き込んでいる。

「こんにちはっ。」

私の声を聞くと、ショウは振り返って、ほんの少しだけ口元を緩ませたが、今日もまた特に言葉は発しなかった。

「今日は何を描いているの？」

私がスケッチブックを見ようとする、ショウはそれを隠そうとした。

「なんで隠すっ!？」

と私がツッコむとショウは声を出さずにニヤニヤと笑った。

私はスケッチブックを覗いてみたが、特に変わった様子はない。単に私をからかいたかっただけのようだ。

ショウのそんな悪戯な態度を見て、どこかにカエルでも隠しているのではないかと一瞬ヒヤリとしたが、ショウが黙々とスケッチを再開したので、私はホッと胸を撫で下ろした。

それから、私はショウがスケッチしている姿を眺めて過ごしていた。

「あっ、あそこに綺麗な花が咲いてるよ。」

「どこ？」

「あれだよっ、あれっ。」

「ホントだ。じゃあ、次はあれを描く。」

と、私が見つけた花を題材にショウが絵を描く事もあった。

そして、ショウがスケッチする場所を変えるたび、私はショウに着いていった。

まるでコバンザメのようにくっつく私だが、ショウはそれを全く気にする様子はなく、スケッチに没頭している。私はショウがスケッチする姿を見るだけで、気持ちが落ち着くような心地よい感じを受けると同時に、私の存在を無視するかのようなショウの行動に寂しい気持ちもあった。

そんな私は、ショウが絵を描いている間、たまにショウの事についても質問をしたりもした。

「ショウは何時ごろからここで絵を描いているの？」

「朝から。」

「朝からかあ。」

(ショウは一体何時に起きているんだ?)

などと私は疑問に思ったが、あまりプライベートな事を聞きすぎるのも良くないと思い、別の質問をした。

「ショウはテレビは何を見てるの？」

「テレビはあんまり見ない。」

「そっか、それじゃ今ニュースでやってるダムを立て籠もり事件とか知らないんだ？」

「知らない。」

東京・奥多摩で起きた"ダム立て籠もり事件"は、つい最近起きた大きな事件で、今やテレビも新聞もネット上でもその事で持ちきりだった。しかし、そんな俗世間の出来事に対し、ショウは仙人のように全くの無関心で興味もなさそうだった。

「それじゃ、好きな芸能人とかは？」

「んー、あんまない。」

「そっか。私はアイドルのKGB54が好き。知ってる？カーゲーベー。」

「名前は知ってるけど、よくは知らない。」

「そっかあ。今ね、高校じゃ大人気なんだよ。」

「へえ。」

そう言うとショウは俯くようにして少し暗い顔をしたように見えた。

ひょっとしたら、自分が学校に行っていないということもあって、学校の話なんて聞きたくないのかもしれない。



それに、よく考えたら、私や私の友達、最近の中高生がどんな事をしているかなんて今のショウに話しても、興味はあってもどう答えて良いか分からないのではないだろうか。  
今、私がそんな風にショウを苦しめてはダメだと思い、私はまたそれとなく昆虫や植物などショウが興味があって詳しくそうな物について話をする事にした。

ショウは昆虫や植物、動物などの自然が大好きらしい。  
そういった物の話をしている時は、とにかくとても嬉しそうだ。それに空や雲にも興味があるようで、青い空を見上げては綺麗で澄んだその瞳をキラキラと輝かせていた。

「綺麗な空だね〜。」

「うん。」

「あっ、あの雲。なんか飛行機みたいな形してるよ。」

「ホントだ。あっちのはカエルみたいな形してる。」

「ええ！？って、全然カエルの形じゃないじゃんっ。」

「あはは。」

「あの飛行機みたいな雲、絵に描いてみたら？」

「ん〜、いいや。」

「なんでえ！？せっかく私が見つけてあげたのに。」

「ふふっ。」

そんな風に、ショウはわざと私に意地悪な事を言う時が多い。

それに、せっかく話しかけても、内容によってはとても素っ気ない返事の時があって、私が3回話しかけるとそのうち1回はまるまる無視されてしまう。大抵そういう時はスケッチが佳境に入り、完成間近な時が多いようだったので、私は絵の進み具合を見て、もう描き終わりそうだなと思った時には話しかけないようにした。

そんな風に過ごしていると、その日もあっという間に時間が過ぎ、ケータイの時計は午後4時40分を迎えていた。そろそろ帰らなければ、魔法が解けてしまう。私は再び自分がシンデレラになった妄想を再開すると、ショウに

「そろそろ時間だから、帰るね。」  
と伝えた。するとショウは、

「うん、また明日。」  
と返事をしてくれた。

また明日も来て良いという事だ。

私はその言葉が嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。もしも今、宝くじで1000万円が当たったとしても、その嬉しさよりもショウの今の一言のほうがずっと嬉しいだろう。

私はショウに手を振って「バイバイ」と言うと、スキップするくらいの勢いでイタリア坂のほうへ向かう。そして、私が振り返るとショウは座ったままこちらを見ていたので、私がまた手振ると、ショウが微笑んで手を軽く振り返してくれた。

そんなショウの姿を見た私はそれまで以上に飛び跳ねるような勢いで、ニヤニヤとした顔のままイタリア坂を駆け下りていった。そして、【キッチン・みやべ】の中を覗き、数名のお客さんが居るのを確認すると、そのまま小走りで家路に着いたのだった。

私はその次の日も、またその次の日もショウに会いに行った。

そうして何度かショウのもとを尋ねるうちに、ショウのおじいさんにも会うようになっていた。

その日も、私がショウを尋ねているそれまでの日と同じく、平和な時間が流れていた。

ショウがスケッチをし、私がそれを見守る。

すると、どこからかショウを呼ぶ声のようなものが聞こえてきたのだ。

ショウは学校に行っていないし、こちらに来てからはほとんど他の人と接触していない様子だったのに、一体誰がショウの事を呼んでいるのだろう。

ひょっとしたら、ショウは宇宙人で宇宙からお迎えが来てしまったのだろうか。

ショウは竹やぶから生まれた"かぐや王子"だったのだろうか。

私がそんな馬鹿な心配をして、自分の目の前にUFOでも現れるのではないかと恐れていると、再びショウの名前を呼ぶハッキリとした声が聞こえた。

声のするほうをよく見てみると、この道の先のほうからだった。

イタリア坂から続く道はS字に曲っているし、木の葉がかなり繁っているため、覗き込むようにしても、この先に何があるのかはハッキリとは見えない。

でも、よく思い出してみると、私が初めてショウに会った日、ショウはこの道の先にある家のほうへ消えていったんだった。あの日の私は、"ショウに迷惑を掛けてしまった"という思いが強すぎて、その日の自分の行動をあまり覚えていなかったけれど。

今、ショウを呼ぶ声はその家のほうからしている。

「おじいちゃんと呼んでるや。」

「おじいちゃん？」

ショウを呼ぶ声の主はショウのおじいさんだった。  
おじいさんはこの先にある家に住んでいるとのことだった。

ショウのおじいさんの話によると、イタリア坂の下にある【キッチン・みやべ】はショウのお父さんがやっているお店だが、お店の建物自体が狭く、生活のスペースがあまりないため、ショウは昼間おじいさんの家で生活しているらしい。

「やっぱり。ショウは、"キッチン・みやべ"のお家の人だったんだね。」

「やっぱり？」

「うん、実はこの前、そんな話をお母さんから聞いたんだ。」

「へえ、そっか。」

私はお母さんとお姉ちゃんが、ショウの事をあまり良く言っていなかった事を思い出したので、それ以上は話さないでおいた。

ショウは【キッチン・みやべ】で夜寝て、朝6時にはイタリア坂を上がってここにやってくる。  
そして、ショウのおじいさんの家からさらに奥まった所にある、"おじいさんの家の納屋"を自分の部屋代わりにし、毎日絵を描いたりして過ごしているとの事だった。

(ショウはとっても早起きなんだな。)

ショウのおじいさんは、ショウに優しくかったし、私にもとても優しくかった。

「いつもショウタと遊んでくれてるみたいで、どうもねえ。」

「い、いえ、そんな・・・と、とんでもないです。」

私はショウの家族と話すという緊張と恥ずかしさからうまく話せなかったが、ショウのおじいさんはとにかくとても優しい人だったので、いつの間にかいろんな話をするようになっていた。そして、

「ショウタは学校へ行っていないから、勉強がなかなかねえ。」

と話したので、私は思わず、

「今度私が教えますよっ！」

などと生意気にも答えてしまった。

すると、ショウは少し怪訝そうな顔をしたが、ショウのおじいさんが、

「よろしく頼みますねえ。」

と言うとショウは、

「ええー。」

と口では嫌そうに言っていたが、なんだかとても楽しそうに笑っていた。

ショウとは少しずつ話をする頻度が増えていると思うし、ショウのおじいさんとも会う事ができた。私は一歩一歩確実にショウとの距離を縮める事ができているような気がして嬉しかった。

ショウのおじいさんと、ショウに勉強を教える約束をした次の日。

私はショウのスケッチを見てのんびりと過ごした後、夕方になると"ショウのおじいさんの家の納屋"で、ショウに勉強を少しだけ教えた。"おじいさんの家の納屋"はプレハブでできていて、だいぶ年季が入っている。

元々はショウのおじいさんが物置として使っていたそうだが、ショウが引っ越してくるという事で、ここで生活ができるように少し手を加えたいらしい。

納屋の中には、ショウが使っているスケッチの道具が入っている棚と、絵を描くための机、それに古くて大きいラジオが1つと照明器具が置いてある。その他にも物置時代の名残と思われる物がたくさん置かれていて、雑然とした雰囲気だった。

私とショウはその机に並ぶようにして座り、私がショウの家庭教師となって勉強を見た。時間割などないし、参考書などもない。それでも、中学1年くらいの勉強ならなんとか教えられる・・・と思っていたのだが、実際にはそうもいかず、わたしもよく分からないところは飛ばしながら教えた。

「なんだ、ミサキも分かんないんだ。」

「しょうがないじゃん。もう何年も前に習ったとこだもん。」

と私は開き直ったが、コレではダメだと思い、家に帰ると自分の宿題などお構いなしに、中学の勉強の復習をし、次の日のショウの勉強に臨んだ。

そしてその次の日も、スケッチをするショウの傍で、青い空をボーっと眺めたり、

(ショウはどうやって鉛筆を動かし、どうやってスケッチをしてるのかな?)

などとショウを見て過ごしたり、ショウといろいろな話をして、陽が傾き始めると納屋でショウに勉強を教えた。

私はショウの家庭教師として、なんとかしてショウに勉強を教えなければいけない。  
そんな使命感でショウに勉強を教えていたが、ショウは、

「これは分かんない。」

「これは覚えなくてもいいよ。」

となんとも投げやりな覚え方をしている。

それでも私は、こうしてショウに勉強を教えたり、ショウの描く絵を見る事ができて、今年の夏休みを人生の夏休みの中で・・・いや、全ての人生の中で一番楽しい時間を過ごす事ができているのではないかと感じる事ができていたのだった。

ショウと出会ってからは、1週間ほどが過ぎた。

私は、ショウと初めて会った日から毎日ショウと会っていたが、自分の家でショウの話をする事はなかった。

話したい気持ちが全くなかったといえば嘘になるが、ショウの話を自分の家族にするのはなんだか恥ずかしくてたまらなかった。どんな男の子なのか聞かれたら、どう答えようかと考えるだけでも、頬がリンゴのように真っ赤になるのが自分でもよく分かった。

それに、お母さんとお姉ちゃんはショウの家のことについて、いろいろ問題があるというような話し方をしていたので、私がショウと知り合いであるという事を話した時に、どんな事を言われるかという不安もあった。

もしショウの事を悪く言われたり、ショウとは関わってはいけないというような事を言われたらどうしよう。私は、自分の全てを奪われてしまうかのような感覚を味わう事になってしまうだろう。そんな恥ずかしさと不安から、私が家でショウの話をする事はできなかった。

しかし、私がイタリア坂について食事の時に触れてからというもの、お姉ちゃんはイタリア坂に興味を持ったのか、それからたまにイタリア坂について他の人に聞いているらしい。私がそれらの話の中で1番よく覚えているのが、イタリア坂の下にあったイタリア料理専門店についての話だ。



「あそこはね、contatto（コンタット）って名前のお店だったらしいんだけど。元々そんなに人が通らない道だし、それに値段が結構高かったらしいわよ。味はなかなか美味しかったらしいんだけどね。」

「それで、そこの店主が少し変わった人で・・・とても無口な人だったらしいの。でね、地元の人があまり近づく事もなくて、場所も場所だけに観光客もほとんど来なくて、ついには閉店しちゃったってわけ。」

「んで、笑っちゃうんだけどさ。そこの料理を食べたサオリの彼の話によるとね、そのお店で一番美味しかった料理はナポリタンなんだって。でも、ナポリタンってイタリアにはないじゃん？ イタリア料理専門店なのに変な話よねー。」

お姉ちゃんは1人でそう話すとゲラゲラと笑っていたが、私はべつにおかしいと思わなかった。イタリア料理専門店にナポリタンがあったって良いじゃないか。それに、一体どんな味だったのか私も食べてみたかったとさえ思った。

その話を聞いた夜、私は【キッチン・みやべ】の料理を食べてみたいと思い始めていた。ショウのお父さんが作る料理って、一体どんな味なんだろう。そう思った私は居ても経ってもいられず、マイにメールをした。

(明日"キッチン・みやべ"でお昼食べない?)

(きっちん・みやべ??)

(例のイタリア坂の下にあるお店。あそこ、すごく美味しそうなんだよ。)

(へー、じゃあいってみるか!)

翌日、私はマイと待ち合わせをして【キッチン・みやべ】へ行く事にした。

夏休みに入ってから、マイと会うのはこれが初めてだった。ショウとはもう1週間以上も一緒に過ごしているのに、小学校の時から親友のマイとこんなに長い期間会わなかったのは、ここ数年では初めかもしれない。

マイから一緒に遊ぶお誘いがあったにはあったのだが、私はショウと過ごすために断っていた。でも、マイに会っていろいろと話もしたかったし、"キッチン・みやべ"に1人で行く勇気もなかったのが、今日マイに付き合ってもらえて本当に良かった。

マイとは午前11時に待ち合わせた。

「ミサキチ、おはよっ。」

「おはよー。」

「夏休みに入ってから初めてだねっ、会うの。」

そう笑いながら言うと、マイは私の肩をポンと叩く。

宿題は進んでいるかとか、少しばかり話をしたあと、暑いから中に入ろうという事になり、私達は"キッチン・みやべ"の店内へと入った。

女子高生の私には少し重たいガラスのドアを開けると、冷房の風が私とマイの体を優しく包んでくれた。

「いらっしゃい。」

カウンターの奥から、低く渋い声がする。

店内には店員らしき人が他に居なかったし、いかにも"そのお店のマスター"という雰囲気があったので、おそらくあの人がショウのお父さんなのだろう。

ショウのお父さんは白い制服に赤いスカーフを首に巻き、この辺の飲食店としてはやや立派過ぎる格好をしている。顔にはヒゲを蓄え、色黒で実に渋く、ダンディーな紳士といった雰囲気だ。

店内には観葉植物が置かれ、壁には絵画が何枚か飾られていてなかなかお洒落だが、それほど広くなく、カウンターには5つほどの席、それにテーブルが3つあって、それぞれに椅子が4つずつあった。

私達がジロジロと店内を物色していると、

「2名様かな？」

とまた低く渋い声でショウのお父さんが尋ねてくる。

「は、はいっ。」

私が緊張して少しうわずった声で答えると、

「じゃあ、そこの空いてるテーブルへどうぞ。」

と私達を席まで案内してくれた。

お昼時という事もあり、他にも5人ばかりお客さんが居て食事をしている。

正直、それほど人通りの多い場所ではなかったが、そのわりにはお客さんが入っている印象だ。

テーブルの上にメニューがある。

「どれにしよっか？」

マイはメニューを手に取ると私に聞いてきた。

「ん～、何が良いかね。」

私は優柔不断だ。そして、マイはそんな私以上に決断力がない。

私達がどれにしようか迷っていると、ショウのお父さんが、

「ランチはAセットとBセットがあるんだけど。それだとコーヒーと小さいけどケーキも付きますよ。」

とカウンターから、何かを白い布巾で拭きながら教えてくれた。メニューを見ると、たしかにランチセットにはAセットとBセットがあり、Aセットは"ロシア風ハンバーグ"、Bセットは"クロムツのポワレ"と書いてある。

「じゃ、あたしはAセットにするからミサキチはBにすれば？」

「ええ！？私もハンバーグのほうが良いよ。」

「あははっ、やっぱりミサキチもお肉がイイかぁ。」

結局、私達は2人ともハンバーグのAセットを頼んだ。値段は1050円。

この辺の飲食店にしてはかなり高いし、高校生の私達には大きな出費だったが、ハンバーグにライス、コーヒーとカップケーキまで付いているし仕方ない。

私達は料理を食べながら、誰々と誰々のカップルがこんな事があったとか、友達の知り合いが援交で補導されたとか、担任のコウイチを学校近くのカフェで見かけたとか、久しぶりに2人だけで話をする事ができて盛り上がった。

（そうか、あのカップルにはこんな事があったのかぁ。）私はマイの話を聞きつつ、（私とショウはこれからどうなるんだろう？）などと妄想しながら、一生懸命働くショウのお父さんを時折チラチラと見ていると、

「ミサキチ、まさかあのマスターの事……。」

などと手で口元を隠し、小声で聞いてきたので私は、

「違うよ、あの人はね……。」

とショウの事を話しかけたが、やっぱりうまく説明できない気がしたのでやめておいた。

そんなこんなで、結局2時間近く話をしながら食事を済ませると、私達はすっかりお腹がいっぱいになっていた。

「美味しかったねー！ミサキチ、良いお店見つけたじゃん！」

「うん、今度またエリやタナボンと一緒に来ようね。」

「そうしよう、そうしようっ！」

実際とても美味しい料理に感動したし、他の友達を誘いたいという気持ちはウソではなかったが、心のどこかにショウのうちのお店にもっともっとお客さんを呼びたいという気持ちがあったのもまた事実だ。

私達は会計を済ませると、【キッチン・みやべ】を出た。

店を出る時には、ショウのお父さんがわざわざカウンターから出てきて、ドアを開けてくれた。そして、とても落ち着いたしっかりとした声で、

「ありがとうございました。良かったらまた来てくださいね。」  
と言って、優しい笑顔で見送ってくれた。  
私とショウのお父さんは一瞬目が合って、私も笑顔を返していたため、

「ミサキチ、なかなか良い雰囲気・・・。」  
と、マイがいやらしい目つきでニヤニヤとしながら私に耳打ちしてきたので、  
「そんなんじゃないって！」  
と否定したが、ショウの事は結局話せなかったのも、マイには変な疑惑を持たれたままになってしまった。

「ミサキチ、これからどうすんの？図書館行く？」  
「ん～、私ちょっと用事があるからごめんね。」  
「そっか、じゃ次いつ遊ぶ？」  
「まだちょっと分かんないけど、予定がついたらメールするね。」  
「了解っ、それじゃまたね！」

マイはそう言うのと図書館のほうへ向かって少し歩き、ピョンッと飛び跳ねるように振り返って手を振った。

私も自分の家のほうへ少し歩いてマイに手を振り、そのまましばらく歩いていたが、マイが路地を曲ったのを確認すると坂の下にゆっくりと戻り始めた。

そして、ショウの事を話せずマイに申し訳ないという気持ちを抱いたまま、イタリア坂の中ほどまで一気に駆け上がっていった。

私がイタリア坂を上ってショウの姿を見つけた時、ショウは空を見上げていた。

私との挨拶もそこそこに、ショウはじっと空を見続けている。ショウのスケッチには植物のほかに、青い空が描かれている事が多い。きっと青い空がとっても好きなのだろう。

「ショウは空が好きなんだね。」

「ん～・・・まあ、そうかな。」

「どうして好きなの？」

「ふふっ。べつに理由なんてないけど。」

とショウは鼻で笑った。

たしかに、空がどうして好きなのか聞かれて理由を答えるのも難しいかもしれない。

私は（バカな質問をしたな・・・）と自分を自分でけなそうとしたその時、

「空って、広いから。」

とショウが話し出した。

うん、たしかに空は広い。

「どこまでも続いているし、邪魔するものが何もないから。」

「ホント、広いよね。」

するとショウは、

「この空の上には宇宙があって、宇宙には星が無限にあるし、この銀河系と同じような銀河も何千万とあって、太陽や地球みたいな星も数え切れないくらいある。それに、宇宙自体も実はいくつもあるかもしれないらしいし、そもそもこの宇宙自体も5次元の世界かもしれないって言われてる。」

と話を続けた。

「へえ、そうなんだ・・・。」

私はショウの宇宙に関する知識にただただ感心するばかりだった。5次元って何が何だか私にはさっぱり分からない。私が目をはてなマークにしていたので、ショウはもうこれ以上話しても私には伝わらないと思ったのかもしれない。

「空を見てるとそんな宇宙と自分が繋がってるのがよく分かるから。だから好き。」  
と自分がどれほど宇宙が好きなのかをしっかりと伝えるように私の顔を見つめながら、自分が好きなものを語ることがいかに楽しいか私に伝わってくるくらいの笑顔で言った。

ショウがこんなにもじょう舌に私に話したのはこれが初めてかもしれない。  
それほどショウは空や宇宙が好きなのだろうなと私は思った。宇宙に関する知識が全くと言って良いほどなかった私だが、宇宙に関してはちょっとした夢があった。

「私ね、いつか宇宙旅行をしてみたいって思ってるの。」  
私がそう言うと、ショウはちょっとバカにするような顔をして笑ったが、私は話続ける。  
「それでね、無重力を体験して。宇宙から地球を眺めてみたい。」

そう言って、さっきショウが宇宙の話をする時のような顔で自分の夢を語り、その楽しさがショウに伝わるくらいの笑顔でショウの目をしっかりと見つめて語った。

「宇宙旅行か。」

「ショウは宇宙へ行ってみたいと思わない？」

私がそう聞くとショウは空を見上げて、

「行ってみたい。」

と言ったので私は、

「じゃ、いつか私と一緒にいこうよ。」

と言った。すると、ショウはその話をまたバカにするように少し笑いながらも、

「うん、いこう。」

と答えてくれた。



一般人が宇宙に行くなんて、まだまだ先の話なのかもしれない。それなのに、一緒に行ってくれるという事は"私とショウは何十年先も一緒に居る"という事になるのだろうか。それはひょっとしたら・・・などと考えてしまい、私はショウの答えを聞いてからしばらくは言葉が出てこなかった。するとショウが、

「宇宙にはカエルも連れていこう。」

と言ったので、私は即座に、

「やだよー。」

と眉をひそめて言うと、ショウは「あははっ。」と楽しそうに笑っていた。

私はそれがなんだか悔しくなり、負けじと、

「勉強道具も持っていくからね。」

と言ってやった。しかし、ショウはなかなか手強い人物で、

「持ってってもやらないけどね。」

と言って笑われてしまった。

私が悔しさのあまり口を尖がらせていると、その顔が可笑しかったのか、ショウはそれまで以上に楽しそうに笑っていたので、私もなんだか楽しくなってクスクスと笑いだしてしまっていた。

そうして、2人で一緒にしばらく笑った後、私は空を見上げながら、今度は真面目な顔でショウに言った。

「いつかホントに宇宙に行けたら良いね。」

するとショウも空を見上げたまま、

「うん。」

と真面目な顔で答えてくれた。私が、

「宇宙からイタリア坂は見えるかな。」

と言うと、ショウはとてもクールにそして簡潔に一言、

「見えないよ。」

と答えた。

「そっかあ。」

私がとても残念そうに言うとショウは、

「宇宙から見たら人間なんてちっぽけで、小さな存在だから。」

と言った。

(うん、たしかにその通りだ。)

ショウのその言葉に、私は返す言葉が何も出てこなかった。

ショウって勉強は嫌いだし無口だけれど、凄く頭が良くて、時々妙に納得してしまうような事を言う。そこがまたショウの魅力なのだけれど。

それからしばらく二人で空を見上げた後、ショウはまた絵を描き始めた。

私はその姿を黙って見つめ、頭の中では、(いつかショウと2人で宇宙に行くぞっ!)という気持ちでいっぱいになっていた。

これから何十年経ってからでも良い。

私はショウと二人で宇宙に行って、宇宙からこの地球を眺めたい。

イタリア坂は見えないらしいけど、そこにはきっと、二人が見たい光景が広がっているに違いないから。

8月初旬のある日、私はいつもより少し早くに家を出た。

いつもはお昼過ぎくらいにショウと会い、それから夕方まで一緒に過ごしていたが、この日は家を早く出る理由があった。それは、私のお気に入りのパン屋さんのパンをショウに食べさせてあげようと思ったからだ。

ショウは学校へ行かなくなってから家のそばから出た事がない事がないようだったし、この辺りの飲食店などにも行った事がないという話だったので、ぜひとも私の地元の味をショウに知ってもらいたかったのだ。

私がいつも買いに行くパン屋さん、【ジャンズ・ベーカリー】は私の家から10分ほど歩いた所にある。いつもは学校の登下校の際に買っているのですが、夏休みに入ってから行っていません。コンビニと同じで、わざわざパンを買いに行くためだけにそこまで歩くのはしんどいと思ったが、ショウにパンを食べてもらうためだったらこのくらいの苦勞なんて事はない。

私はのんびりと散歩するような気持ちでパン屋さんへと向かっていたが、この日の太陽もまた私を焦げ焦げにしようと企んでいる。

私がパン屋さんに着くのが早いのか、私がパンのように焼かれてしまうのが早いのか。

私と太陽の戦いが始まった。

しかし、今の私には焦げ焦げにされるわけにはいかない理由があった。

それは言うまでもなく、ショウの存在だ。

今日はショウのためにパンを買いに行くのだし、ショウにパンを届けるまではどんな事があっても歩み続ける覚悟がある。私のそんな鉄のような堅い意志のおかげか、今日はあまり汗もかかずに目的の場所【ジャンズ・ベーカリー】へと到着した。

【ジャンズ・ベーカリー】はこの辺りでは珍しく、とてもお洒落で綺麗なお店だった。実はこのパン屋さんの店主はフランス人で、"ジャン"というのもその人の名前からとって付けられたらしい。

(なんでわざわざこんな田舎で、フランス人がパン屋さんを始めたのだろう?)

きっと私には想像もつかない理由があるのだろう。ひょっとしたら、ここの店主は何か特別な才能があって、その才能を生かすため、わざわざこんな所に店を構えたのかもしれない。あるいは、フランスで何かやらかして、こんな遠い島国の小さな田舎町にまで逃げ隠れて生活しなければいけなくなったのかもしれない。

本人に聞けば、そのような疑問も解決するのだろうが、私はそのような疑問をあえてそのままにして、あれだこれだと想像するのが好きだったので、あえて聞かないようにしている。

私がお店の前に着くと、お店の看板にはいろいろと書かれていたのだが、その一番上に書かれていた「本日のオススメ：ビーフカツサンド」という文字が目に入った。その下にも何か書かれていたが、そちらには目もくれず、私はお店の中に入ると、ビーフカツサンド2つをトレイに乗せてレジへと進んだ。

パン屋さんの店主であるジャンさんは、お店の奥でパンを作っている最中だったらしい。そのため、レジは別の店員さんが会計をしてくれた。

その店員さんはアスカさんと言って、私がパンを買いに来る時にたまに対応をしてくれているのだが、とても知的な雰囲気、私の憧れの女性だった。私も大人になった時にこんな風な女性になれたら、きっとショウも喜んでくれるんだろうな。そんな風なことを思いながら会計を済ませると、アスカさんの、

「ありがとうございました。」

という一言と素敵な微笑みで見送られ、私は【ジャンズ・ベーカリー】をあとにした。

それから私は家の近くまで戻ってきて、そのままイタリア坂へと向かった。

家を出てから、既に30分以上は歩いているだろう。それでもショウに"私のお気に入りのパン屋さん"のパンを食べてもらえるという嬉しさから、私は元気よくイタリア坂を駆け上がっていった。すると、いつもより早く私が姿を現したので、ショウはビックリしたのだろう。

目をクリクリさせて私の事をしばらく見ていたので、

「今日はいつもより早く来たよ。」

と私が言うと、

「そう。」

とその驚いた顔とは違い、ショウは実に淡白な返事をした。

そして、既にその時間に絵を描き始めていたため、そのまま何事もなかったかのようにスケッチを再開する。

「今日はね、ショウに良い物持ってきたよ！」

「良い物？」

「うん、これだよ。」

そう言って私は自分の体の後ろに隠していたパン屋さんの袋を取り出した。ショウはそれを見ても、まだ何かよく分かっていないようだった。

「ビーフカツサンド。私のお気に入りのパン屋さんのパンだよ。」

「へえ。」

「もうお昼食べた？」

「まだ。」

「じゃ、良かったら食べてっ。」

と私が喜び勇んで言うと、

「お昼はおじいちゃんが用意してくれるから。」

と少し予想外な返事が返ってきてしまった。

そうか、いつもはおじいさんが作ってくれて、それを食べているのか。  
だとしたら、おじいさんの準備を無駄にってしまうかもしれない。

(失敗したなあ。)

私がそんな風に思い、ガッカリして肩を落としていると、

「ちょっと聞いてくる。」

とショウはおじいさんの家のほうへかなりの勢いで駆け出した。

「もう用意してあったらいいよー！」

私は走って遠ざかるショウに少し大きな声で言ったが、ショウは振り返ることも返事をする事もなかったので聴こえたのかよく分からなかった。

それから3分ほどして、ショウはおじいさんの家のほうから戻ってきた。

「まだ用意してなかった。」

「ほんと？」

「うん、だからそれ貰う。」

本当にショウのおじいさんがまだお昼ご飯の準備をしていなかったのか、それとも私に気を使ってくれてるのか分からなかったが、せっかく買ってきたのでぜひショウに食べてもらいたい。おじいさんには申し訳ないが、ここはひとつショウに私のパンを食べてもらう事にしよう。

「はいっ、2つあるから一緒に食べよっ。」

「うん。うちで食べよう。」

私とショウは納屋に入ると、2人で机に向かい一緒にビーフカツサンドを食べた。

途中、ショウがソースを口の周りに付けたままにしていたので、私は笑いながらそれをティッシュで拭いてあげたりした。

ショウは実に美味しそうにパクパクとビーフカツサンドをたいらげた。

「美味しかった。」

「美味しかったねっ。また今度買ってくるね。」

「うん、お金は？」

「お金？いいよ、私のおごり。」

「それじゃあ悪いから、あとで払うよ。」

「いいよ～。ホントにいいから。」

「いや、払う。」

「いいってば……。」

私とショウはしばらく、パンの代金を払う払わないの攻防を続けたが、最後は"次からはショウにもお金を貰う"という事で落ち着いた。ショウは意外と頑固なので気をつけなければいけない。

そして、再び「パン、美味しかったね。」という話になると、ショウはとても嬉しそうにしていた。もしかしたらこんな風に女の子と二人で食事なんてショウにとっては初めての経験だったのかもしれない。

私だって、ショウみたいな存在の男の子と二人で一緒に食事なんて初めてなんだし……。

だけど、想像していたほどの緊張はなかった。こういうシチュエーションというのはもっと緊張して、なんにも話せないものかと思っていたのに。きっとショウという存在が、私にとっては近くて温かくて大きなものだから、安心して一緒に食事ができたのだろう。

ビーフカツサンドを食べ終わって10分もすると、ショウはスケッチを再開し、納屋の近くあった"蟻の巣"を熱心に見つめていた。そして、そのまま"蟻の巣"の様子をスケッチしたかと思うと、今度は空を見上げて青い空に浮かぶ雲を一生懸命描き始めていたのだった。

次の日も、前日と同じように夏らしく実に良いお天気だった。

私がいつもと同じようにイタリア坂を上り、いつもと同じように挨拶をすると、ショウはいつもとは全然違う事を口にした。

「今日はミサキを"秘密の場所"に連れて行ってあげるよ。」

「ひ、秘密の場所？」

実に妖しい響きに私は一瞬戸惑ってしまったが、よく聞いてみると、ショウが絵を描く時にたまに行く穴場的な場所の事らしい。

ここは小さな山ではあるが、ショウのおじいちゃんの家から少し歩くと、家の周辺とはまた少し生息している植物などが違うらしい。ショウは、たまにそこへ行って絵を描くらしく、そこが自分のお気に入りの場所なので私にもそこを紹介してくれるというのだ。

ショウはいつも人目を避けて生活している。そのため、ショウが1人で移動するのは、この小さな山の中と、【キッチン・みやべ】の近くだけで、そのほかの所へは行った事がないらしい。でも、そんな"秘密の場所"をどうして私に教えてくれる気になったのだろう。

私は、

「なんで、私に教えてくれるの？」

と聞いてみた。すると、

「昨日のパンのお礼。」

と実に明確な答えが返ってきた。

ショウは意外と礼儀正しい。私がパンをご馳走した事に対して、きちんとお礼をしようというのだ。今時の若者にしては実に素晴らしい心がけではないか。



「着いてきて。」

ショウは私にそう言って、ショウのおじいさんの家の草が繁った庭のような場所を通り、そのまま進みだした。

(こんな所を歩いて行って大丈夫なのかな?)

と思うくらい、道らしい道は無い。

それでも、少し歩くと道のようなものが現れてきて、そこからは少し歩きやすくなった。

私がショウの後を着いて歩き、数分もすると無数に生えた木のあいだに、ポカンと小さな空間が現れた。幅が5メートルもないくらいの小さな空間だが、そこには綺麗な花がいくつか咲いていた。

そして、その先には幅が10センチ程度の小さな小さな川が流れていて、その上をトンボが飛んでいる。この山自体が、周りの町から切り抜かれた別世界のような存在だったが、この"秘密の場所"は、この山の中でさらに別世界のような空間としてそこに存在している。

「絵がうまく描けない時とかにここに来るんだ。」

ショウは辺りを見回しながら、そこに生息する草や花を眺めながら言った。

「そうなんだあ。なるほどね。」

私は思わず感心したように答える。

「ここに居ると、ほかの事を忘れられるから。」

ショウはしゃがんで、赤く色づいた花を見つめ、目を輝かせながら言った。

たしかに、ここに居ると世の中で起きている事や、学校とか勉強とか、そんな小さな事はどうでも良くなってくるような気がする。時間の流れすらも忘れてしまいそうなくらい、ここは特別な場所という感じが、初めてここを訪れた私にも伝わってきていた。

きっと"秘密の場所"は、学校へ行けていないショウにとって、心のオアシスのような場所なのだろう。

ここでショウは、窮屈でストレスが溜まってしまうような人間関係や、あの人がどうしたとか、この家の主人はこうだといったくだらない噂話、暗く陰惨な社会で起こる様々な事件など、世間で起こる"どうでもイイ日常"から解放されて、自分の好きな事にだけ打ち込み、自分だけの道を歩む力を蓄えているに違いない。

私がそんな風に思い、この"秘密の場所"の空気を堪能していると、いつの間にかショウは座り込んでスケッチを始めていた。

「ショウ、秘密の場所を教えてくれてありがとね。」

私がそう言うと、ショウは少しだけ微笑んだが特に何も返事はなかった。

「私も嫌な事があったらここに来ようかな。」

と私が言うとショウは、

「良いよ。僕とミサキ、二人の秘密の場所にしよう。」

と答えてくれた。

今日からここはショウと、ショウにここを教えてもらった私の"二人だけの秘密の場所"になった。

----- 第4章へ続く -----

※第3章内に登場する「ジャンズ・ベーカリー」及び、「ジャンズ・ベーカリー」内の登場人物は [yukarix4000](#)さんの作品から、[yukarix4000](#)さんの許可を頂き使用させて頂きました。